

群馬シルクと西欧文化の「風」

NPO 法人 森の会（群馬シルク研究会）

令和2年度「群馬シルクの日米シルクロード」で群馬県の明治から現代における歴史上で養蚕・製糸とキリスト教が深く関わっていることを予告した。養蚕・製糸業は、群馬県の国際化を全国に先駆けて実践し、このことにキリスト教が深く関わっていることを明らかにすることを目的に、令和3年度は「群馬シルクと西欧文化の「風」」をテーマに製糸とキリスト教の果たした役割と県民生活について研究した。

1 研究の実施状況

- (1) 研究期間 2021（令和3）年6月～2022（令和4）年2月
- (2) 実施場所 島村教会、安中教会、旧アメリカンボード宣教師館、オンライン会議
- (3) 参加人員 延べ32人
- (4) 研究内容
 - ① 群馬の文明開化は、蚕糸業を媒体としてキリスト教を通して運ばれた
 - ② 境島村の蚕種業とキリスト教
 - ③ 前橋の蚕糸業とキリスト教
 - ④ 西毛地域の蚕糸業とキリスト教
 - ⑤ 「富岡製糸場と絹産業遺産群」から学ぶ

2 研究成果

① 群馬シルクと「文明の光」

昨年度の「群馬シルクの日米シルクロード」の研究の中で日本の経済基盤が明治17年以降アメリカとの生糸貿易に深く依存しており、かつ昭和20年の敗戦からの復興にもアメリカとの生糸貿易が大きな貢献をしたことを見て取ることが出来た。その中で生糸は、経済だけでなくキリスト教と密接にかかわって西欧文化を持ち込み群馬の民主化運動に製糸経営者が関係していることを知り今年度の「群馬シルクと西欧文化の風」の研究を行った。

群馬が古くから養蚕・製糸・絹織物が盛んだったことについては、高崎市吉井町界隈の渡来人の影響があったことが知られている。開国と同時に横浜を舞台に生糸商人が活躍し、生糸直輸出の新井領一郎や蚕種の直輸出貿易に境島村の田島弥平らが取り組み、新しい日本の夜明けをリードした。これらの活動の中にキリスト教の影響が大きかったことを明らかにすることが出来た。群馬シルクは、経済だけでなくキリスト教と密接に関連して「新しい西欧文化と思想」を持ち込み、県民の福祉、教育、民主主義の向上に貢献した。世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、シルクを通して群馬県民の国際感覚を顕在化させた歴史的な象徴である。このことを多方面から研究することは、群馬県民が蓄えてきた優れたDNAを未来に結びつける大きなメルクマールになると考える。私たちは「振りかえれば未来」を活動の基軸に据えてさらに研究を進めていきたい。

② 廃娼運動、女子教育の先進県

廃娼運動は、長い封建社会の中で虐げられてきた女性の権利と民主主義を確立する明治時代の中期に全国規模で展開された大運動であった。このような中で群馬県の製糸業者が、キリスト教に出会い女性の権利回復、民主主義に目覚め、いち早く取り組んだことは注目に値する。廃娼運動は、全国的に広がっていたが群馬県が、全国に先駆けて廃娼県となった背景には製糸業者を軸にしたキリスト教の広がりとその思想が反映していたことを明らかに出来た。生糸貿易で早くから外国事情に接し「文明の光」を求めていた人々とキリスト教が結びついたことは疑う余地が無い。

明治の過酷な女工の労働環境を鋭くえぐり出した「女工哀史」のような労働環境にキリスト教はどのような影響を与えていたかについても調査した。深沢雄象や深沢利重などのクリスチャンが経営していた工場では現代でも模範となるような工場経営がなされていたとの記録に接することが出来た。また、前橋に器械製糸技術の研修に来た京都地方の製糸家が新しい技術と共にキリスト教を持ち帰って京都地方に郡是製糸を起しキリスト教の理念を工場経営に生かして地域の模範工場となりその後郡是製糸は昭和62年まで営業が継続された。西毛地域を中心に発展した碓氷社、熱心なキリスト教徒の湯浅治郎が経営した国光社、徳江製糸場など先進的な労働環境を作り出そうとしていたことを垣間見る事が出来たが、残念ながら群馬県全体としての女工の労働環境については突き詰めることは出来なかった。

③ 群馬シルクを通して先人達の国際感覚

生糸・絹織物は、発祥や伝来の経過や取引を見ても一級の国際商品であり常に人類の憧れの商品であった。群馬県は6世紀末の観音塚古墳の遺品から絹織物が発見されており、古くから日本の中心的な生糸の産地であった。裏を返せば県民は一貫して国際商品の中心にいたとも言える。1869（明治2）年にはイタリア公使が群馬県の蚕種の調査に来県し、1870（明治3）年のスイス人ミューラーの指導で国内で初めての器械製糸場である前橋藩営製糸所が稼働し、前橋は、全国から視察者が大勢訪れ、新しい製糸技術の拠点になった。同時に、この工場経営者達はキリスト教の伝道にも力を入れていた。1872（明治5）年にフランス人ポール・ブリユナの指導で官営富岡製糸場が稼働し、1873（明治6）年の速見堅曹が大蔵租税権頭松方正義に提案した「製糸改良基礎ノ意見書」で生糸貿易の必要性を強調し、1876（明治9）年新井領一郎を直輸出の調査でニューヨークに派遣し、生糸の直輸出貿易が始まり、1880（明治13）年に直輸出貿易を目的に結成された「同伸社」に国内の優良製糸会社がこぞって参画し、その中心メンバーは県内製糸業者であった。1872（明治5）年には田島弥平など境島村の蚕種業者は「島村勸業会社」を設立し1879（明治12）年に田島弥平、田島善平、田島弥三郎がイタリアに蚕種の直輸出貿易を敢行した。明治時代の群馬県の先人達がこれらのダイナミックな活動を展開する中心的な人物群像の中にキリスト教の影響を受けた人々が多数いた。幕末から明治期の群馬県の蚕糸業者は、優れた国際感覚を共有し、大胆に経済を動かしていた。その思想的な根源には少なからずキリスト教の影響があった。

④ 「富岡製糸場と絹産業遺産群」から学ぶ

シルクは国際的な商品である。この国際商品の国内最大の産地である群馬県は必然的に国際感覚が磨かれていった。鎖国から開国へ大きく転換した明治初期の外貨獲得には生糸以外の商品があまりなかったため日本を救ったのは生糸貿易であった。世界遺産の物件を見学する折りに、日本の現在の基盤を作った産業遺産であることを深く理解できるようなアピールが必要と考える。今から120年前に群馬県の先人がイタリア、フランス、アメリカとの生糸や蚕種貿易で切り開いた歴史に励まされ学ぶことはこれから生きていく上で大きな教訓になる。

製品を作る根本は技術である。「富岡製糸場と絹産業遺産群」は常にその時代の最先端の技術を導入し改革を図ってきた。「ものづくり立県群馬」の由来もここにあると考えられる。時代に即した新技術開発によって世界遺産は優れた模範でもある。「生産から直輸出まで」のたゆまぬ努力が進歩の源泉で

あることを世界遺産は示している。

生糸を通して持ち込まれたキリスト教も順風満帆とはいかず様々な逆風もあったが、陋習にとらわれない自由な県民風土がそれを跳ね返して「新しい文化の風」を受け入れていった。常識にとらわれない自由な気風についても世界遺産から学ぶことは多い。

昨年の「群馬シルクの日米シルクロード」、今年度の「群馬シルクと西欧文化の風」の私たちの取り組みは稚拙なものだが、先人の艱難辛苦に学び、未来への道筋の種を蒔くつもりで取り組んできた。世界遺産10周年を記念して、シニア世代には担ってきた歴史が極めて貴重なものであったことへの確信と誇り、未来を担う子ども達には新しい時代に向け群馬県民の先駆的で勇気あるDNAを受け継いでいくためにわかりやすい「富岡製糸場と絹産業遺産群」の「県民副読本」の製作を提案したい。

【報告書】

1. 群馬県の蚕糸業とキリスト教

キリスト教は、約2000年前にユダヤ教を母体として生まれた西アジア起源の宗教で2000年に及ぶ歴史を通して主として欧米文化の精神的支柱としての役割を果たしてきた。

上野国（群馬県）にキリスト教が伝わったのは1607（慶長12）年イエズス会のホレモン神父が厩橋を訪問している」（「共愛学園100年史」）と言われている。1543（天文12）年にポルトガル船が種子島に漂着した時をキリスト教の日本伝来とすれば、それから60年後に上野の国に伝来したことになる。

織田信長は、伝来したキリスト教に興味を示し、キリスト教を受け入れたが、それは西欧の新しい文化を吸収し、それを領内に適用し、経済活動を活発にしようと考えたものでキリスト教の教えに共感してキリスト教を受け入れたものではないことは多くの研究で明らかにされている。その後、豊臣秀吉から徳川家康にいたるまでキリスト教は「厳禁の宗教」として迫害されていた。

丸山知良の「群馬キリスト教史」（みやま文庫）によれば「日本切支丹宗門史」の上野国関係の記事には①一人の神父と修道士が、1607（慶長12）年江戸の北方3日路の地で誰（伝道師）も訪問したことのない上野の地を訪問した。（中略）また、共愛学園100年史では1620（元和6）年フェルナンデスが沼田を訪問とある。②1612（慶長17）年。この年、関東の上野・・・に伝道があった。神父が関東の上野に行った。③これまで宣教師たちが一切入った事の無い上野でフェルナンデス神父は、天使のような待遇を受けて沼田に13日間逗留した。とある。このことから群馬県へのキリスト教の最初の伝道は1600年代の前半であった事がうかがえる。「この時代は、キリスト教信者への取り締まりは厳しく全国で弾圧と処刑が相次ぎ殉教者が続出していた。1623（元和9）年三代将軍家光が就くと迫害に拍車がかかり・・・キリシタン達は表面上は仏教徒を装いながら秘密結社化した組織によって信仰の継続を図ろうとした。いわゆる「隠れキリシタンである。」（共愛学園100年史）

明治時代になってもキリスト教への禁制（明治元年の太政官布達）は変わらなかったが、欧米列強の抗議を受けて1873（明治6）年2月20日に260年ぶりに日本はキリシタン禁制を解除し、キリスト教は正式に日本における宗教団体として公認された。

1859（安政6）年5月の横浜開港によって外国との貿易が始まり生糸が国際的に脚光を浴びるに従い養蚕・製糸業は、急成長を遂げるようになった。群馬県においてキリスト教が広く伝えられるようになったのは、横浜開港により生糸貿易が盛んになり外国との取引が活発になるに従いキリスト教が持ち込まれたことによる。この時の生糸取引の活況の様子は「前橋大繁盛、（取扱高は）前年ニハ（取扱高は）10倍ナリ」「前橋糸市（いといち）例年ヨリ百倍ス、至リテ繁盛」等と赤城神社神職が書いた「年代記」に記録されていると言う。生糸価格も安政初年から明治初年にかけて6倍に及ぶ高騰を見せ、その活況振りがうかがえる。

この経済の活況に乗って上州商人は、こぞって横浜に進出して生糸貿易を行い欧米の文化に直接触れるこ



とになる。養蚕・製糸の輸出貿易の成果を上げるために、英語の知識は最重要な課題であり、加えて新しい情報と西洋文化、技術、知識の習得も不可欠になった。当時、英語学を手っ取り早く学ぼうとすれば宣教師などとの交流を行う必要があり、当然のようにキリスト教にふれ、理解し、入信するようになっていった。こうしてキリスト教は、外貨獲得の中心商品である生糸を扱う蚕糸業の指導者層に受け入れられていくことになった。

明治前半期の群馬県内のキリスト教信徒数は、全国的に見て東京、大阪、神奈川、兵庫に次いで第5位と多く、西那須野協会100年史は「明治初期において人口1万人につきキリスト教信者は、東京都32人、北海道14人、神奈川県13人、群馬県12人であり群馬県はキリスト教が盛んな県であった。」と記しており、さらに「これは新島襄による安中を中心とする伝道の影響が大きかった事とともに、群馬県の主要産業であった蚕糸業による海外貿易の影響も見逃す事は出来ない」と指摘している。丸山知良もこれは新しい文化を取り入れようとする意欲が旺盛であることを基盤にして、養蚕・製糸業が盛んなことによることが多いと「群馬のキリスト教」(みやま文庫)で指摘している。製糸業者がどのようにしてキリスト教信者になったかについて興味ある報告が「群馬県のキリスト教」にある。「沼田市の星野宗七・るいは、明治元年に生糸貿易の隆盛を見て横浜に進出した。(中略)長兄が、銀治、次兄が光多。(星野光多は後に牧師として活躍)家業の生糸商を成功に導くためには外国語が必要だと宣教師バラのもとに通い英語を学び聖書を説かれて洗礼を受け慶應義塾に学び熱心な信者になって行った。星野あいは、後に津田塾大学の創設に大きく貢献して初代学長になっている」。この星野一族のように、当初は、キリスト教は、生糸貿易に欠かせない「英語学の習得」であり、生糸貿易のための「英語の習得」であったが、キリスト教の教義を理解する中で「文明の光への憧れ」と深く結びつき洗礼を受けキリスト教徒として布教に力を注いでいる。

2. 群馬シルクと廃娼運動とキリスト教

明治初期から前半期に新島襄と群馬の養蚕・製糸指導者の交流もあり製糸・養蚕を通してキリスト教布教の地盤が確立していった。このことは、群馬県の自由・民主・平等・自治の基礎を形成し、1879(明治12)年の県議会開会へと結びついていった。当時の県議会議員44名中全議員が何らかの形で養蚕・製糸業にかかわっていたことを見ても群馬県の養蚕・製糸業の隆盛振りが見て取れる。この県議会は、①議会にかけられた予算案等の調査のための調査委員会の設置。②娼妓貸座敷付加金を地方税に組み入れる事。③貸座敷改良、すなわち「廃娼」の事。を主な議題にしている、キリスト教信仰を土台にした人間平等、民主主義の実践を色濃く反映していた。また「廃娼」運動については、日本で最初に提唱されたが、キリスト教婦人矯風会も活発に活動していた。

「群馬県議会史第2巻」は以下のように記録している。「娼妓は、淫奔の風俗を乱す事が甚だしい。禁止しても裏で侵す者も居るが公認すれば尚更ひどくなる。群馬県は娼妓貸座敷が非常に多いところで、娼妓の害は、倫理道徳を破り、風俗を乱し、資産を失い、仕事を怠け、青少年を誤らしめ、父子夫婦を離れさせ、賭博、盗賊の道へ走らせる。その被害は甚大で、すべての罪悪は娼妓貸座敷にある。そのような業者に税金を課すのは良くない。このような理由で我々は娼妓廃絶を請願する。県令閣下には県民の幸福のため娼妓廃絶を望む」1882(明治15)年、35名の県議会議員各個人が署名し、湯浅治郎の提案で「請願」では無く「建議」として県令楫取素彦に提出している。このことに関して業界からの巻き返しや賛否両論が激しく闘わされて1882(明治15)年4月14日県令楫取素彦は、群馬県令甲第27号をもって「娼妓」を布達した。こうして群馬県は1888(明治21)年6月限りで「貸座敷営業及娼妓稼を廃止する」ことになった。しかし事はそう簡単には運ばず、娼妓実施期限寸前に佐藤典三知事は「存娼派」の主張に沿って群馬県令第32号で「娼妓存続」を容認し、中村元雄知事が発した群馬県令第39号によって1893(明治26)年12月31日限りで「娼妓」が実現するが、今度は、公娼復活を目指す「公娼設置」派と「娼妓推進」派との間で激しい論戦が続いた。この問題は1898(明治31)年11月24日古荘嘉門知事による群馬県令第51号によって「娼妓」が決定し、群馬県は、



全国で最初の「廃娼」県になり日本の民主主義を大きく前進させる原動力となった。この運動は、県内外のキリスト関係者や様々な進歩的な人々の共同の力が大きかったことは当然だが、碓氷社の萩原鎌太郎社長はじめ県下の製糸関係者、生糸商も大きな力を発揮した。

萩原は、1878（明治11）年西毛に精糸原社をモデルにした碓氷座繰精糸社の元組を設立した。1879（明治12）年精糸社に糸を持ち込む組が碓氷郡各地に結成され13組となり、安中市原市に碓氷座繰精糸社の本社を置いた。碓氷社は、明治30年代になると碓氷郡を越えて県外に組織を拡大した。碓氷社50年史は冒頭に「わが碓氷社は、1878（明治11）年の創立にして、わが国産業組合法の制定に先立つこと20余年の往時に於いて吾が国に産業組合を建設したる吾が国産業組合の先駆である」また「碓氷社は、本邦組合製糸の元祖である」と宣言し、その経営理念の柱は、萩原鎌太郎の創業の言葉にある。「吾が、碓氷社の組織は、即ち此の一家団欒（だんらん）ということに最も重きを置き…」と始まりキリスト教的な生活共同体の精神を説いている。言葉の

裏には、同じ時期に長野県などで発達した器械製糸の女工の待遇などへの批判があるようにも受け取れる。「大きな工場を作り、農家の子女をたくさん集め、長時間の労働を強いていること」を、萩原は「今や文明の余勢は、此の尊ぶべき一家団欒の一部を破壊しつつある」と指摘し「碓氷社は、この一家団欒を大事にする」としていた。それは、碓氷社の萩原の思想が、常に地域の戸一戸の農家の生活向上、生活共同体の確立に向いていたことを示している。「一家団欒」のうちに生活水準を上げること、それこそが、当時の碓氷社が目指した近代化であった。この一家団欒の思想は、キリスト教の理念と共通しているものがあり、洗礼こそ受けていないが、萩原はキリスト教徒との共同行動を活発に行っている。第2代社長の宮口二郎は、熱心なキリスト教徒として製糸業はもとより「廃娼運動」にも力を注ぎ地域福祉の向上に活躍した。このように見ると群馬シルクとキリスト教は、地域の生活水準、福祉や文化の向上に深い影響を持って進んだと言える。碓氷社第2代社長宮口二郎はアメリカから帰国した新島襄に共鳴して有田屋当主湯浅治郎などが設立した安中教会の熱心な信徒としても活躍した。湯浅治郎も1886（明治19）年に製糸会社国光社を設立し、生活苦の信徒救済のために蚕の共同飼育所などを設立するなど地域の蚕糸業の発展に努めた。また湯浅は、廃娼運動の先頭に立ち、同志社大学の設立にも中心となり活動した。このように安中教会と碓氷社の関係は密接で社員であり教会員の者はかなりの数に上っていた。（「日本の近代製糸業とキリスト教」杉本星子）



安中教会

3. 境島村の蚕種業とキリスト教

佐位郡島村（境町大字島村）の蚕種業は、1800-1801（寛政12-13）年頃に岩代（福島県）保原村から清兵衛を教師に雇って蚕種を製造したことが始まりと「蚕糸業沿革調査書」にある。1863（文久3）年には島村の田島弥平が、新築の蚕室で天然の気候に従い蚕を飼育したところ成績の良い蚕種が製造できたと「沿革調査書」に記されている。島村の田島弥平が開発した「清涼育」による飼育方法の蚕種は、優良蚕種として次第に生産量を拡大していった。明治初期、高山長五郎の「清温育」、田島弥平の「清涼育」など群馬県は、養蚕技術の革新が進み優れた蚕種が生産されるようになっていった。

幕末から明治初頭に掛けて国内外から多くの蚕種商人が島村の蚕種調査にやってきたが、それは、1840年代からヨーロッパで猛威をふるった微粒子病を克服するため蚕糸関連の貿易商は、世界を股に掛けて優良蚕種を探していたからだ。微粒子病の予防法は、1869（明治2）年にパスツールによって発見されて、

その治療法が広く普及するのは1880（明治11）年代になってからだった。パスツールの研究が実用化されるにしたがって島村蚕種の海外での売り上げも下降し、1885（明治18）年以降は蚕種の輸出は皆無になり「島村蚕種組合」も解散に至っている。

1869（明治2）年にはイタリア公使一行が公式に群馬県を訪問しているが、主な目的は「群馬県の蚕種業の調査」（「イタリア伯爵糸の町を往く」富沢秀機）にあったとされている。このように群馬県の蚕種の動向は、国際的に注目されていた。萩原進もこの一行の視察は「イタリーで蚕病発生のため蚕種が欠乏し日本から輸入するについて群馬県の前橋に出向いたもの」と「群馬県史」に記録している。

このように上州蚕種は、日本を代表する蚕種と国際的にも認められていて面目躍如として蚕種の輸出に取り組んでいた。

島村の蚕種は、国内外で評価も高く「明治初年から10年頃にかけて蚕種輸出の黄金時代を形成し、年々百数十万枚が輸出され200万円から300万円の外貨を獲得した。これは、当時の生糸輸出額よりも多い金額でいかに蚕種輸出が旺盛であったことがうかがえる。その値段は1枚4円から5円の高値を示した。」（「全国蚕種協会20年史」）。その頃の人夫1人賃が、12銭内外、米1升が7銭から8銭なので蚕種がいかに高価な商品であったかがうかがえる。

1872（明治5）年に田島武平、田島弥平、栗原勘三などが中心になり渋沢栄一の指導の下「島村勸業会社」を設立し、田島武平が社長になり優良蚕種の生産に邁進していく。1875（明治8）年、渋沢栄一は島村の蚕種をイタリアに直輸出するための建議書を明治政府に提出し承認され、島村の人々は、1878（明治11）年太政官布達で蚕種についての規制が全廃されたのを期に東京新橋に島村勸業会社出張所を開設し、栗原茂平、田島儀七、金井明の三氏が横浜に滞在し、蚕種販売に携わった。横浜での活動中にキリスト教の教義に触れて感動した栗原茂平は、島村に戻り「これからは、西洋文化に積極的に触れていかねばならない」と人が変わったようにキリスト教を説いて回り「茂平さんは耶蘇に触れて気が違ったのかも知れない」と言われた。（栗原茂平末裔談）

田島弥平、田島弥三郎、田島善平の3人が1879（明治12）年に第一回蚕種直輸出貿易でイタリアに行き蚕種の直売をすることになり、イタリア・ミラノで蚕種を販売し好成績を収めた。そして蚕種の直輸出は4回にわたって行われた。この直輸出貿易のきっかけはイタリアにおける蚕種の需要が減少傾向にあることに島村では危機感を持ち直接蚕種を売り込む事が決められたようである。この蚕種の直輸出貿易について「西那須野教会100年史」は「イタリアで日本の蚕種が減少傾向を示していたのは、パスツールによって微粒子病の防除方法が確立されてきていて、日本蚕種に依存する必要が少なくなっていたために島村の蚕種の売れ行きが停滞していたのであって、島村にはその情報（微粒子病の解決していること）が伝わってなくて、直輸出貿易に傾いていた。」と指摘している。しかし、一行が顕微鏡を購入して帰ったことなどから見ると、島村の人々は微粒子病対策が西欧で確立しつつある情報はある程度知っていて、むしろ微粒子病対策の技術や今後の直輸出の見通しを調査することも含めてのイタリア直輸出貿易だったと考えるのが妥当ではないだろうか。また、第一回イタリア輸出の行程表を見るとこの長い日程で蚕種の保存をどのように行ったのか。文献で確認はできなかったが「海水で冷やして発蛾を防いだ」と考えられている。

蚕種の直輸出貿易にかかわった田島善平宅で1886（明治19）年4月12日に島村における最初のキリスト教会がもたれ聴衆は200名であったと記録されている。1887（明治30）年に善平は自宅の小屋を改築し教会堂を建設し、これが「日本メソジスト島村教会」となり後に「日本基督教団島村教会」と改称され現在に至っている。島村では田島善平など多くの蚕種製造者達が洗礼を受け西欧文化は島村地域に広く受け入れられていった。

西欧の文化を早く取り入れた島村地域では自由民権運動にも関連し「1882（明治15）年に自由党島村部（自由党の支部）が誕生し、部理に田島弥兵、副部理に田島弥三郎が就任し栗原勘三、田島善平などの蚕種業者、キリスト教者などが有力メンバーとして参画した。その主張は「自由の拡大、国会開設」であり「産業資

本家的自由党员であったと思われる」(「ぐんまの自由民権運動」石原征明、岩根承成)。こうした島村の新しい文化の風土は、蚕種とキリスト教に育まれて地域に根付いていった。「1947(昭和22)年には敗戦によって失われた地域の人々に自信と希望を取り戻すために教会主催の「農村文化大学講座」が開催され以後10年間続けられた。講座は、例年2月から5月にかけて信徒宅(栗原トヨ宅など)で行われ青山学院の教授などが講師として来村した。講義内容は、キリスト教だけでなく「農村復興と協同組合の使命」など農業や農村建設などにかかわるテーマもあった。住民に戦後の新しい時代を生きていく上での指針を与えるものであった。」と「島村教会100年史」の中で宮崎俊弥共愛学園前橋国際大学教授は評価している。

また、日本基督教団島村教会は、1950(昭和25)年に島村めぐみ保育園を開設し地域社会の福祉事業として幼児教育に大いに貢献し現在も継続している。



境島村教会

4. 群馬シルクと女子高等教育とキリスト教

「県都前橋糸の町」。前橋でもキリスト教は、製糸関係者にいち早く取り入れられて信者を増やしていった。「群馬県にキリスト教が伝えられたのは、製糸業との関連に於いてであると言うことが出来よう。その他にも大きな要素が重なってキリスト教が盛んになったのであるが、何と言っても製糸業をあげることができる。」(「群馬のキリスト教」丸山知良)。続けて丸山は「その産業(製糸業)の成果を上げるために西洋文化、科学的知識を熱心に吸収していくときに当然のようにキリスト教に触れ、キリスト教を理解し、信ずるようになっていった。キリスト教は、地域産業としても重要な製糸業を推進している指導者層に受け入れられていったのである」と指摘している。

1870(明治3)年に日本で最初の器械製糸場「藩営前橋製糸所」を建設した中心人物の一人深沢雄象、その婿養子の深沢利重はキリスト教に入信し、特に利重は製糸業の振興と共にキリスト教を通して女子教育や福祉に貢献していく。キリスト信仰にもとづく人間平等、民主主義の実践にこうした製糸業者が率先して取り組んだ。「当時の群馬県内は、キリスト教信仰を有するものも有しないものも、キリスト教精神に基づく民主主義に貫かれていた。」(「群馬のキリスト教」丸山知良)

さらに、深沢雄象がどのようにして洗礼を受けたのか興味深い資料として深沢の娘孝からの聞き取りが「器械糸繰り事始め」(みやま文庫、鈴木和一著)にある。「経済界に苦戦の最中、精神的に寂寥を味わっていた父(深沢雄象)は、心に大きな傷がありました。心の落ち着きを欠いていた時に、ニコライ師が前橋に「邪教」を持ち込んできましたことはひどく父の神経を尖らせました。かつて父が藩のお役にあった当時、キリシタン禁制の誓約書「耶蘇宗門に御座無く候」と言う民間から取った証書は、まだ宅の長持ちに一杯、納められていました。その思想と自らの心の空虚からくる焦りとは、父をひどく興奮させ直ぐにニコライの講義所に向いて談判に及び、都合によっては一刀両断にしてしまうつもりだったそうです。ニコライを論駁するつもりで師のもとに参りました父は、続いて二度三度と吸い付けられるように参りました。……論駁するつもりだった雄象は二度、三度ニコライを訪ねて行くうちにいつかその言う所に興味を持ち、ついに往年のお目付け役で、キリシタンを迫害した者が、ニコライの膝下に伏して洗礼を受けました。それから雄象は生糸改良と耶蘇宣伝の両刀使いとして当時の蚕糸業界に特殊な色彩を染出しました。全国各地から蚕糸業の見学に来た書生さん工女さんに昼は製糸法を夜は耶蘇の教えを説きました。それ故製糸(技術)が各地に散って行くと一緒に新宗教も各地に種を蒔かれました。郡是製糸の重役であった高倉平兵衛さんなども、前

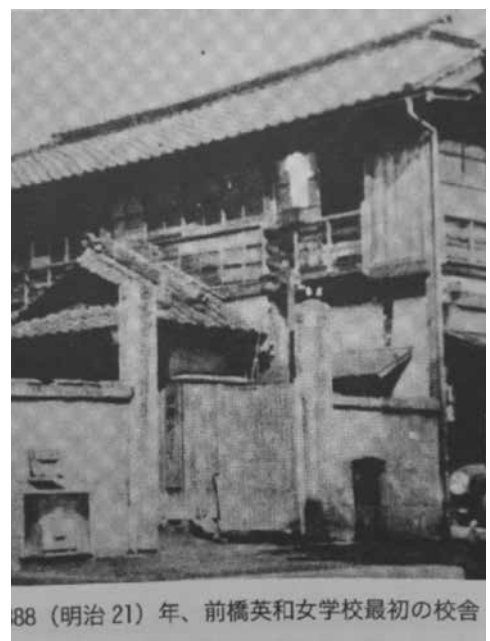
橋に製糸見習に來られて製糸法と一緒に新宗教を持ち歸られた方でした。水沼製糸所にも間もなくキリスト教の講義が開設されるようになりました。」と記述している。しかし、残念なことに「キリスト教の何に共感しての入信なのか？」についての記述が無く、想像する以外にない。1881（明治14）年頃には、深沢雄象や洗礼を受けた夫人や娘の孝は、前橋の関根製糸場などを回り精力的に布教に努めていることが資料で明らかになっている。深沢雄象はじめ深沢利重などの熱心な信仰はやがて製糸工女の待遇改善、企業内教育へと発展し、「女工哀史」と言われた時代にキリスト教の自由・平等・博愛の精神が深沢父子の工場では実行に移されていた。その実情を野条愛助は「前橋案内」で深沢の工女待遇として次のように記している。

- 一、 会社の利益が多く上がった時は工女に還元する。
- 二、 運営は合議制とし、世話方の株主、工女からそれぞれ議員を選び、株主と工女側から異論があれば三名以上で惣代人に献言できる。
- 三、 このために工女が経営参加出来る道が開かれて生産意欲を高め製品の改良にも大きく有利に働いた。それは民主主義の今日でも通用する内容であり武士道にキリスト教の精神が加えられたといえよう。「関根夜話」はそれを具体的に物語っている。（「上州蚕業秘史・関根夜話」の背景：近藤義雄）

同じようなことが碓氷社でも行われていたと思われ、湯浅治郎が経営した国光社もキリスト教精神が反映された製糸工場であった。伊勢崎の徳江製糸も同様な傾向を持った経営がなされていたと思われる。こうしたことは一部分かも知れないが、群馬の製糸家の中にキリスト教の影響から民主主義を経営に反映させていた製糸工場を垣間見ると同時にそれを実践しようとする姿が見られることは興味深いことである。

また、京都地方から器械製糸技術の伝習に深沢雄象の下に來た新庄倉之助と高倉平兵衛などが製糸技術とキリスト教を持って帰郷した。彼らは1889（明治22）年に器械製糸工場羽室組を設立し波多野鶴吉が1896（明治29）年社名を郡是製糸とした。郡是製糸は、キリスト教の精神が貫かれており工女、幹部社員みな平等の社内教育が徹底していて地元では「あそこは表は工場だが、裏は学校だ」と言われるほど人材作りを重視した経営を貫いていた。波多野は聖書の「善き樹は善き果を結び、悪しき樹は悪しき果を結ぶ」の言葉から「善い人が良い糸を作り、信用される人が信用される糸を作る」と考え人作りに力を入れていた。波多野が創業した郡是工場は、社内教育や契約養蚕農家とのつながりを通して南丹後地方の農村における布教にも務め地域の福祉に貢献した。また、キリスト教の影響を強く受けた郡是と碓氷社の経営方針が酷似していることは注目に値する。郡是製糸発足70年以上もたった昭和40年代まで「グンゼ前橋工場」の女工は「良妻賢母」を基本に社内教育が徹底されていて、地域では「嫁にもらうなら郡是の女工」とまで言われていたほど評価が高かった。

1885（明治19）年に前橋英学校が開校した。学校設立に協力した人々の中には多くの製糸家、生糸商が居たが、その多くはキリスト教徒だった。特に製糸家の深沢利重は「共愛学園の生みの親、育ての親」と言われ中心人物として大きな役割を果たしていた。教育内容を記した前橋英和女学校の「概則」第一条には「英語および和漢学をもって女子に必要な高等普通教育を教え善良有用なる女子を養成する」（「近代まえばし史話」宮崎俊弥）とあり当時とすれば最も進歩的な教育目標が明記されている。「前橋英学校は、自由民権運動家の高津仲次郎（後に代議士）が設立の中心になり……教員にも前橋関係者が多くいました。」（中略）「まもなく内容が高度過ぎたのか生徒が減少し廃校することになってしまいました。同校に勤めていた不破きよなどの女性教師は存続の見込みが無くなった時、在学して



88（明治21）年、前橋英和女学校最初の校舎

写真：共愛学園100年史より転載



いた女学生が勉学の道を絶たれるのを残念に思い女学校を作って何とか救済しようと動き始めました。この願いを受けて深沢利重や高津仲次郎らが話し合い女学校設立を決定し、明治21年6月21日前橋英和女学校として県から認可されました。これが共愛学園の前身になります。」「近代まえばし史話」宮崎俊弥) 1889(明治22)年学校運営団体として各地、各教会から友愛を募り共愛社が設立された。発起人は深沢利重、高津仲次郎、不和唯次郎、新島襄、湯浅治郎など全員がクリスチャンであった。翌23年に上毛共愛学校と改称された。校名の改称は、上毛にあるすべてのクリスト教徒が支える学校の意味を有していると言われている。この時代クリスト教主導の女子学校教育の最大の目標は女性の解放、そのための女子教育にあった。また、近代化を目指す上で英学校は欠かせないものと考えられていて、英学校は、県内に複数設立されたが、その背景には製糸業と生糸とクリスト教があったことは注目に値する。また、学校法人清心幼稚園は、1895(明治28)年にクリスト教徒によって設立され、明治時代に認可を受けた幼稚園で現在まで継続している全国で5番目に歴史の古い幼稚園である。明治期の製糸関係者とクリスト教徒は、女子の教育や廃娼運動に見られるように自由と民主主義、人権と権利に力を入れていて、このことを通して相互扶助の共同体社会の実現を目指していたと思われる。

今回の調査で、群馬県の近代史の特徴は「養蚕・製糸とクリスト教にある」と言う識者もいるほどこの両者の関連は深いことが確認できた。

【参考文献】

- 『碓氷社』安中市学習の森ふるさと学習館 2014(平成26)年、朝日企画(株)
- 『碓氷社50年史』復刊版(財)群馬地域文化振興会、1927(昭和2)年、朝日印刷工業(株)
- 『製糸改良講習録』非売品 碓氷社 1911(明治44)年、成立舎
- 『群馬懸蠶業家名鑑』非売品 大久保茂太郎著 1910(明治43)年、商業新報社
- 『群馬県議会史第2巻』群馬県議会事務局編 1953(昭和28)年
- 『島村教会100年史』非売品 日本基督教団島村教会 1987(昭和62)年、あかつき印刷所
- 『境町町史』非売品
- 『共愛学園100年史』上巻非売品 学校法人共愛舎共愛学園 1998(平成10)年、朝日印刷工業(株)
- 『西那須野教会100年史』非売品 日本基督教団西那須野教会 1991(平成3)年、(株)ぎょうせい
- 『近代群馬の思想群像』高崎経済大学付属産業研究所 1988(昭和63)年、(株)貝出版企画
- 『イタリア伯爵糸の町を往く』富沢秀機 2017(平成29)年、上毛新聞社
- 『群馬のクリスト教』丸山知良著 みやま文庫123復刻版 1992(平成4)年、朝日印刷工業(株)
- 『群馬の生糸』みやま文庫101復刻版 1987(昭和62)年、朝日印刷工業(株)
- 『群馬の養蚕』みやま文庫86復刻版 1983(昭和58)年、朝日印刷工業(株)
- 『富岡日記・機械糸繰り事始め』復刻版みやま文庫94 1985(昭和60)年、朝日印刷工業(株)
- 『近代まえばし史話』宮崎俊弥著一般社団法人前橋法人会 2017(平成27)年、上毎印刷工業(株)
- 『ぐんまの自由民権運動』みやま文庫 2016(平成26)年、朝日印刷工業(株)
- 『前橋繁盛記』みやま文庫53復刻版 1974(昭和29)年、朝日印刷工業(株)
- 『クリスト教入門』山我哲雄著 2014(平成26)年、岩波ジュニア新書